Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-03

<資料>自民党宏池会(池田派)機関誌『進路』総目次について

品田, 裕
久米, 郁男

(Citation)
神戸法學雜誌,51(2):151-252

(Issue Date)
2001-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81004947

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004947

神戸法学雑誌　第五一巻第二号　二〇〇一年九月

自民党宏池会(池田派)機関誌『進路』総目次について

品田　裕
久米郁男

一、「宏池会研究」の目的と意義

「宏池会」は、一九五七年に池田勇人を中心に誕生した自民党の派閥である。以来、4人の首相を輩出し、ほぼ常に日本の政治運営の中心に位置してきた。そればかりでなく、政策集団として吉田茂の親米・軽軍備・経済中心主義の路線を引継ぎ、これを国民的コンセンサスの下、定着発展させたという点で、戦後政治の政策的中心でもあった。なぜ「宏池会」がリベラルな保守路線を選び、そしてそれが今日に至る自民党政治の本流たりえたのか、この問題を解明することは戦後政治史ばかりでなく現代日本の政治過程の理解に不可欠である。以上のような関心に基づき、五百旗頭真教授を代表にした共同研究が、文部省科学研究費補助金（基盤研究B「宏池会の研究　―戦後保守本流の政策に関する研究―」課題番号一一四二〇〇一四）を受け、平成一一年度から始まった。その研究目標は、戦後史の内政と外交にまたがる重要な局面において、政策と政局の双方につきどのような役割を「宏池会」が果たしたのかを明らかにすることにある。

自民党内の派閥にしては、「宏池会」には独自の特徴がある。一般に五五年体制下の自民党派閥は、首領を中心

に総理総裁の座を狙う党内党的な同志集団あるいは構成員に政治的資源を分配し便宜を図る互助組織とされ、従来の派閥研究もそのような利益共同体としての（とりわけ負の）面を議論してきた。しかし、「宏池会」はそうした自民党派閥の一つでありながら、以下の点に関し、戦後日本の政治外交史において格別の役割を果たした。第一に、造船疑獄の後、政治資金規制が実施されたのを機に池田が派閥と政治資金の私物化に一線を画すべく創設して以来、「宏池会」は首領個人の所有物につきない組織としての自立的性格を持っていた。第二に、池田が下村治ら論客を集めた政策研究会（「木曜会」）の成果として「所得倍増計画」を提案したように、「宏池会」は機関誌を持ち政策提案をする集団であった。第三に、「宏池会」は戦後日本政治において政策・路線面で中心的な役割を担ってきた。改憲再軍備をめぐる左右の激しいイデオロギー対立の後に登場した池田内閣は「所得倍増」という経済主義的な共同目標を掲げ、通商日本としての発展を遂げることにより国民的コンセンサスを回復した。以後、「宏池会」の軍事に消極的でソフトな経済主義的手法を重視する保守リベラル路線は、今に至るまで受け継がれている。このように「宏池会」は、従来の派閥研究では捉え切れない、具体的な政策路線を持つ組織であり、その路線が戦後日本政治の政策軸となってきたという点で重要な研究対象である。

しかしながら、「宏池会」に関する先行研究は乏しいといわざるを得ない。戦後政治史研究においては、一九六〇年までと一九七〇年代以降についての研究は、過程論・外交史的研究も含め、相当程度蓄積されてきたが、今日の政治体制が定着した（そして池田が活躍した）六〇年代前半については未だ手薄である。また、その後も重要な局面で政権を担い、政策面で戦後日本の主軸を支えてきた彼の系譜も、内幕物を除けば、近年の自民党研究や派閥の批判的分析に比して、注目されてきたとは言い難い。この共同研究は、「宏池会」の活動、とりわけその政策路線に焦点を当てることにより、このように空白となっている重要部分にタテ糸とヨコ糸の双方を通し、戦後日本政治の展開についての総合的理解を深めるものである。そこで、われわれは最初に、「宏池会」の政策路線が決定さ

れ、そして、それが自民党の中で主流として受け入れられていくプロセスを丹念に追究することから始めることにした。そのために、当時の関係者へのインタビュー調査に並行して、「宏池会」の機関誌『進路』を収集・調査することにより、事実を確定する作業をすすめてきた。『進路』は後述解題で示す通り、池田とその周辺が自らの政策アイディアを早い段階で発表し、その経済重視の政策路線を整備していくための場であった。この重要資料の散逸を防ぎ、利用しやすい形で保存するとともに、内容のあらましを公表することは、一九六〇年代の日本政治研究にとって重要な基礎作業である。そこで本稿では、以下、この『進路』について解説を加え、その総目次を掲載・公表する。

二、『進路』解題

雑誌『進路』は、田村敏雄氏の創刊になる雑誌としてスタートし、その後、池田勇人を擁する宏池会の機関誌的存在となっていった雑誌である。その創刊は、一九五四年五月である。その創刊号では、池田勇人が「麦を食う話」として、有名な「貧乏人は麦を食え」発言について、その真意を語っている。しかし、そもそもの雑誌の趣旨は、以下に掲げる田村の巻頭言及び創刊号の編集後記に見られるように、派閥の機関誌となるものではなかった。

(創刊号巻頭言)

「日本は一体どうなるのだろう?こういう心配をしている国民は少なくないと思う。日本は何処へ?ということは、実は自分はどうなる?ということであり、同時に、一方で世界はどこへ?という問題と密接につながっているのである。

今日のわれわれの生活は、精神的にも物質的にも、絶対に孤立しているものでもなく、日本国民としての全体と

不可分につながっているのである。それをとかく忘れ勝ちなのがお互だ。いわんや、われらの生活が全世界と深くむすばれていることなど、思いも及ばぬのが常である。われらの生活信条の第一は「この小さな自己が、全国民、全世界に強くつながっている」という自覚に立つことでなければならぬ。

全国民と大局的利害を共にし、全人類と運命をわかつほかない現代生活の実態を知るならば、第二の信条として、「私ひとり得をする」という利己的態度をすて去って、他人と共に、全国民と共に、全世界と共に相たすけて生きるという心構えをもたねばならぬ。かつて田中王堂氏は「徹底個人主義」を唱えたが、現代生活は個人主義に徹すればどうしても協同に到達せざるを得ないような、そういう文明条件、生活関係になっているのである。このことは、個人の場合と共にいわゆる階級的立場にもあてはまる。階級対立を十九世紀的もしくは二十世紀前半的に考えてはすでに現代生活の実体に合わない。

世界につながる日本、日本に固くむすびついている「われ」このわれは如何に生き如何に進むべきか。その進路の発見と着実なる前進とは現代青年の自ら解くべき課題でなければならぬ。」（田村敏雄）

（創刊号「編集室より」）

「編集について先ず考えたことは、この小誌を読者諸氏の共有物にするということであった。我々が一つの既製品を提供するということでなく、編集者、読者が力を合せて、一つのものを創造してゆく―。この意味に沿って内容の充実に努力する決意でいるが、読者諸氏も、どしどし註文をだしてもらいたい。本号は準備不足の関係もあって中央の名士の寄稿が多くなったが、地方の記事、殊に実生活の中からの偽りのない声を、誌面に反映させてゆきたい。政治、経済・文化のあらゆる問題についての盛んな投稿を望んでいる所以である。

次に考えたのは、平易な解説の書ということである。現代日本の文化は、最高の水準においては国際的にもひけ

をとらないものがある。ただとかく一部の有識者の間に止り、一般大衆のものとなっていない慨みがある。例えば多く出ている学術、専門の書も、大衆を教えるという点について、配慮を欠いている。この文化的断層を埋めるところに本誌存在の意味をもちたい。そんな訳から、今後とも解説的な記事を、多く掲載してゆくつもりである。また多忙な読者諸氏の生活を考え、短文を多くし問題のプロセス（過程）を簡略して、結論を急いだものもある。より以上専門的なものを必要とする読者の為には、別途の方法―読書案内または指導、座談会講演会などを開く計画もある。なお以上の如き計画を有効に生かしてもらうためにも、本誌を中心とした、読者の地方サークルを作っていただくよう希望する。御連絡があれば出来る限りの御援助をさせていただく。

本誌は単なる教養、趣味の書である以上に、実生活上の好伴侶となりたいと願っている。つとめて抽象理論的なものを避け具体的な問題、応用的な事項を多く取りいれた理由である。国際的な諸問題を取りあげたのも我々の今日の生活は、国際的な規模の一環につながるものであり、従って問題の真の解決は国際的な観点に起つところにあるという考え方に基くものである。

私は私なりに、右の如き理想をもって、本誌の編集に当ったつもりであるが、出来上がったものをみると、及ばざること遠いものがある。号を追って内容の充実に努力する以外になかろうし、また冒頭に言ったように、読者諸氏の御支援がなくてはかなわぬことでもある。

ようやく校正をおわり、この愚文の筆をおいて、ほっとして窓外をみると、陽のうつる敷石の上で、街路樹の柳が芽をふいている。あわただしい日々の生活に追われている間にも、季節はためらいなく、歩みをつづけている。都会生活を余儀なくされている私達にとって、自然の懐にはいって働く田園の生活が羨まれるのはこのころである。せめて、公園のベンチに腰をおろして、そこはかとない風に乗ってくる若葉の薫りに、心の渇きをいやすのである（渡辺春平）

風かるき相模の入り江ひびこえて、よせくる潮に蟹あわただし」

進路は、後掲総見出しの示すように、一〇〇号を越えて刊行された。しかし、田村敏雄と池田勇人の死去、その後の派閥解消論の中で『進路』は廃刊されることとなった。一九七九年六月に復刊が企図された新『進路』は長くは続かなかったが、その復刊の辞には、旧『進路』刊行の事情が以下のように要約されており、参考になる。

「歳月による風化作用とでもいうのか、十六年を経て〝進路〟を復刊するにあたり、一部マスコミその他では、かつての〝進路〟を「池田勇人の所得倍増と高度成長政策に照明をあて、日本の進路を決めていく上に貢献した」と評価し、その継承としての復刊であるということで採りあげています。

〝進路〟はもともと故田村敏雄氏の個人雑誌であって、氏の池田総理に対する献身によって宏池会の機関誌として機能し、池田ブレーンの拠り所として活用され、百号を越えた刊行を果たしたものですが、それを支えたものは、田村氏の使命感と卓れた学識にあったとしかいいようがありません。

田村氏逝き、続いて池田総理の訃を迎え、有志の熱望した続刊も「派閥解消」の犠牲となって、その時代の役割を終えることになりました。」

（『進路』編集人　小野秀樹『進路』一九七九年六月号　巻頭言「〝進路〟復刊にあたって」）

さて、当初、進路は官界、経済界、学界など各界に執筆者をもとめ、「政治・経済・文化の平易な解説書」を目指した。創刊期においては、「農作業の近代化」や「進む開拓事業」といった農業・農村関係の記事が多い点、ま

た「民主主義講座」と題して啓蒙主義的な解説が連載されている点が注目される。

また、一九五五年七月の第二巻七号では、憲法問題をめぐってと題して、朝日新聞から護憲論、改憲論を代表する論考を転載している。ひとつは、片山哲元総理による「感情論に先走る改悪派」であり、神川彦松自主憲法期成同盟理事長による「戦争ボケと占領ボケを一掃」である。興味深いのは、両論に対する解説である。改正絶対反対論も、左派社会党のごとく、自分らが政権を握ったら、その手で改正するのだと公言しているものもあるし、改正論者も今すぐ改正しようと言うのではなく、いかに改正すべきか研究しようと言うのが主流であるとした上で、憲法論議の本質は見かけほど両者相容れないものではないとしている点である。憲法問題という当時優れて政治的であった問題を、非政治化する宏池会の路線を予言するような体裁となっている。

さて、進路に池田勇人が頻繁に寄稿する時期が何度かある。第一は、一九五五年八・九・一〇・一一月の四回連続登場である。「霞ヶ関脱出の記」、「吉右衛門と私」、「他山の石」、「統一と合同」と題する寄稿であり、前二者が政治からはやや距離を置いたものであるのに対して、後二者はイギリス政治と社会党の左右合同を論じつつ、日本における二大政党制のあり方について論じたものである。そこでの基本的な主張は、二大政党制が機能するためには両党間のイデオロギー距離がそう遠くないことが前提であり、社会党がより現実的に、自民党がより進歩的になることが訴えられている。

池田が次に寄稿するのは一九五七年一月号である。当時、池田は石橋内閣の大蔵大臣であるが、「家庭料理のうまいわけ」と題して唯物論的思考への批判を述べたものであり、政局や政治に直接絡むものではない。同年三月号には「一千億減税と完全雇用」と題する記事が掲載される。これは、同年一月八日の日比谷公会堂での池田の演説を掲載したものである。四月号に掲載された「私はこう考える」は、衆議院予算委員会での池田の答弁を収録している。これら二つの記事は、池田蔵相の「一千億減税・一千億施策」についての理解を得ようとするものである。

この時期から『進路』は、池田をプロモートする路線を鮮明にし始めたと言えよう。

そして、同年一〇月、『進路』は財政研究所内進路社発行の雑誌から、宏池会発行になる宏池会機関誌となる。その際の、「謹告」を以下に記載しておく。

「創刊以来四年、『進路』は皆様の物心両面の御支援によって、おそいながらも着実に成長をとげてまいりましたが、このたび、さらに一段と内容を充実し誌勢を拡張するため、従来の財政研究会内進路社発行を改めて、宏池会発行に切り替え、宏池会員の機関誌とするとともに、さらに広く一般に誌友を求めたいと存じます。

従来、しばしば、『進路』はいったい何を信条とするのか、ねらいは何か、天下にのぞむ綱領はどうかなどと半ば激励の意味を含めた質問をうけました。これに対しては笑って答えず、というほどに高踏的であったわけではありません。ただ、えらそうに立派なことをならべてもその実が伴わなくては、恥ずかしくもあり、皆様に対して相すまぬことになるので、文章にして掲げなかったまでで、一貫したねらいはありました。つづめて申せば、身心ともに健全な人間として、国民として生きてゆくにはどうすべきかを中心にして、思想的には左右に偏向せず、社会、国家、世界、要するに外を見、外に働きかけるとともに、常に内に省み、己を充実するという心構え、求心的努力による内部充実が同時に遠心的外向性のエネルギイとなるような考え方生き方を、具体的に平易に実践的に、読者諸賢とともに求めて行こうというのが、いわば本誌の悲願なのです。そのため、雑誌はなるべく大きくしない、文章はやさしいとともにあまり長くしない、できるだけ素直に事実を見る、両陣営のイデオロギイと生活の実態を冷静明白に知り、かつ判断するよすがを供する、毎号必ず健康法に関するできるだけ実践的な記事をのせる、といった方針でやってきたことは四年来の愛読者諸氏のお認め下さるところかと考えます。今後もこの方針で進むとともに、一層全国の皆様からの活発な御寄稿によって、活気溢れる誌面としたいと存じます。

宏池会機関誌として新たに発足するに当り、年来の御愛読を謝し、さらに倍旧の御支援をお願い申します。なお本誌に対する御意見御要望等おもらし頂ければ幸いです。
昭和三十二年十月一日」（一九五七年一〇月号）

以後、池田はしばしば同誌に登場し、政見や時局について語っている。中でも、その後の池田政権の成立にとって大きな意味があったのが、「月給二倍論」であった。池田は、一九五九年二月に広島と大阪で時局談を行い、その中で「われわれの経済生活の目標は、究極のところ、国民全体が良い品物を豊に消費することのできるようにすること、生活水準を向上させることにあります」「この気持ちをてっとり早くいえば、月給を二倍、三倍にするということになります」と語った。これが、「月給二倍論」として報道され、議論を呼ぶことになり、池田内閣における「所得倍増計画」に結実していったのである。池田は、この時局談のすぐ後に、日経新聞に「私の月給二倍論」と題する小論を寄稿している（一九五九年三月九日）。進路四月号では、大阪での時局談を、原稿に起こして再録することで、その意図するところを明らかにしようとした。翌五月号では「私の「成長論」と「月給二倍論」の根拠」として『産業と産業人』に掲載された小論を再録している。その後、「政治のねらいは国民生活の向上である」（七月号）、「月給二倍論と日本経済の将来」（九月号）、「日本経済の進路？世界と共に繁栄へ」（一一月号）と、経済主義路線を基軸とした政見が掲載されていく。

その後一九六〇年に入り、安保条約改定問題が政治的には白熱してくる。しかし、一九六〇年一月号に掲載された「日本政治の課題　一、政治と経済の進路、二、本年の課題」において、池田は主として経済問題を前面に押し出して論じている。進路誌上においても、六〇年三月から翌年三月まで、「所得倍増実現の可能性を探る」と題する調査部による連載がなされている。安保の大騒ぎのさなかに、次なる経済の時代への着実な準備作業が、宏池会

機関誌『進路』誌上で進んでいたのである。そこには、政治の季節の後に来る経済の季節の予兆が満ち満ちていた。

三、『進路』総目次

第一巻一号（一九五四・五・一）

個と全と融和（金森徳次郎）
農村の教育（宇田一）
良職人に実践の勇気を望む（山際正道）
保守合同の前提条件（池松文雄）
都会と農村（奥紀伊）
麦を食う話（池田勇人）
草の活用（小坂徳三郎）
中共中国こぼれ話（田村敏雄）
デンマーク事情（高井泉）
中ソ関係の一面
世界の労働運動
アラブ民族主義の立場
栄養の知識
農家の生活改善

酪農の将来
現代の歌人
詩について

第一巻二号（一九五四・七・一）

巻頭言
青年に希望を（衆議院議長　堤康次郎）
日本の経済をみんなの手で（国民金融公庫総裁　櫛田光男）
社会の優等生（小林一三氏の度胸）（ダイヤモンド社会長　石山賢吉）
デンマーク精神のシンボル　ヘンリック・ハンセン選手と語る（本社編集部）
青少年の不良化と民族的劣等感（最高裁家庭局長　宇田川潤四郎）
長寿と食物について（東北大医学部教授　近藤正二）
インドシナ問題の核心（市瀬正幸）
ヤロビ旋風（明大教授・農学博士　宇田一）
〝ハンスト〟によせて（田村敏雄）
俳句欄（喜多村緑郎・市川三升・市川紅梅・森赫子）
業績素工業と農家経済（本社調査部）
葛（奇蹟植物）（ラッセル・ロード）
デンマーク事情（二回）日本農業を研究する校長（玉川学園大学教授　高井泉）

農作業の近代化（農林技官　加賀山国雄）
進む開拓事業（農村リポート）
民主主義とは？［民主主義講座］
北原白秋の短歌（近代の歌人）（瞬彦）
抒情の詩人島崎藤村（林弘）

第一巻三号（一九五四・八・一）
巻頭言
比島の開拓者　ミスター・ワッツ（国策パルプ副社長　水野成夫）
社会の優等生（気概の人松永安左右衛門）（ダイヤモンド社会長　石山賢吉）
国立公園にての所感（明大教授・農学博士　宇田一）
日本人は再起し得るや（日経連渉外部長　三城晃雄）
デンマーク事情（三回）自転車の流れ（玉川学院大学教授　高井泉）
健康長寿のために望ましい食生活（東北大医学部教授　近藤正二）
日本の希望
原子力発電の経済的意義（経審庁調査官　大来佐武郎）
地下資源開発について（通産省鉱山局長　川上為治）
農村二、三男と開拓の問題（農林省農地局長　平川守）
国民総がかりの仕事（田村敏雄）

俳句欄（宇田零雨選）
過剰と不足（W・H・チェムバーリン）
世界の動き
　中共の民族政策（上別府親志）
　西独の労組運動と経営参加法（編集部）
より多量に日光を捕捉する植物（エリク・アシュビ）
農村青年への手紙（橋渡良知）
三つ児の魂（丹波直見）
民主主義の歴史［民主主義講座］

第一巻四号（一九五四・九・一）
巻頭言
農村の健康
　農民の食生活（農業技術研究所員　長沢俊三）
　農村は健康地か（農林省研究企画官　森秀男）
人口問題の将来（人口問題研究会理事長　永井亨）
農業技術の盲点（東海区水産研究所員　天野慶之）
アジアを巡る（一回）中共の港風景（波多江種一）
社会の優等生（藤原銀次郎氏の長所）（ダイヤモンド社会長　石山賢吉）

俳句欄（宇田零雨選）
ディオゲネスの提灯（田村敏雄）
黄変米と実証主義（国会図書館長　金森徳次郎）
黄変米問題の根本的解決（京都薬大　小牧実秀）
新聞の読み方について
　ニュースの表と裏（時事新報主幹　内海丁三）
　不偏不党の問題（東大新聞研究所長　千葉雄次郎）
日光より更に多くの食料を（ジェームズ・アーサー・ラルセン）
将棋人を語る（一回）
　木村名人のこと（下元兎喜雄）
公選代表と多数決の原則［民主主義講座］
直見堂漫談（丹波直見）

第一巻五号（一九五四・一〇・一）

巻頭言
日本における農業協同組合（農林中央金庫理事長　湯河元威）
過剰人口の一人の私見（名古屋大学教授　志方益三）
公民館活動の現状と将来（文部省社会教育施設課長　近藤春文）
社会教育の現状と青年学級（文部省社会教育課長　蒲生芳郎）

水害とカマド（資源調査会事務局次長　黒沢俊一）
砂糖の話［健康と食物］（小牧実秀）
原子力電池による家庭照明
［白昼夢］（田村敏雄）
俳句欄（宇田零雨選）
新興パキスタン瞥見（アジアを巡る）（波多江種一）
もとと己を忘れた世相（時事寸評）（宮脇新）
西ドイツ経済復興の因
［新聞の読み方］
世論の資格（時事新報主幹　内海丁三）
新聞報道の真実性（東大教授　千葉雄次郎）
自由と平等［民主主義講座］
直見堂夜話（丹波直見）
三木本翁と宮城新昌氏

第一巻六号（一九五四・一二・一）

巻頭言
中小企業に科学を（中小企業金融公庫総裁　阪口芳久）
農村青年と新しい農業（開拓連事務局長　原七郎）

社会の優等生（武藤山治の誠実）（ダイヤモンド社会長　石山賢吉）
アジアを巡る（三回）ネールの指導する印度（波多江種一）
デンマーク事情　未成年者のタバコ（高井泉）
国土開発中央道路
同志倶楽部記事録（西村紅楼）
［時事短評］（宮脇新）
顔の責任
［白昼夢］健康国家の夢（田村敏雄）
新聞に関する三つの誤解（時事新報主幹　内海丁三）
人間のための栄養学（島田雅光）
家庭の空気から生まれる病気（ジョン・A・シンドラー）
個の自覚と修練［民主主義講座］
直見堂放談（丹波直見）
読書について

第二巻一号（一九五五・一・一）

巻頭言
日本農業の将来（農林漁業金融公庫総裁　山添利作）

青年との雑談（世界民主研究所長　鍋山貞親）
婦人教育の現状　考える妻・もののわかった母に（文部事務官　金子貞子）
中共視察雑感（高倉正）
光を掲げた人―インドヘーデとその後の栄養学―（小牧実秀）
［白昼夢］（教育国家の夢）（田村敏雄）
［新聞の読み方］新聞の騒ぎ過ぎ（時事新報主幹　内海丁三）
［時事短評］知事三選問題・其他（宮脇新）
風力の将来（ウィリー・レイ）
健康は食物から（北橋茂男）
民主主義と文字［民主主義講座］
直見堂漫語（丹波直見）

第二巻二号（一九五五・二・一）
巻頭言
何故貿易振興をはからねばならないか（日本貿易会専務理事　谷林正敏）
アジアを吹く西北の風―漂流する日本の行方は―（匿名　亜洲青年）
水産日本の将来―海の耕作によって無限の宝を―（琉球水産養殖研究所長　宮城新昌）
「町村合併余話」―物には表と裏がある―（中野清見）
中共視察雑感（二回）―浮かばれない農民―（高倉正）

蓄電池をつなぐ話（田村敏雄）
［青年のための生理学講座］（一）消化と吸収（薬学博士　小牧実秀）
［新聞の読み方］
新聞道の自己否定（元朝日新聞編集局長　白川威海）
報道十二歳説（東大新聞研究所長　千葉雄次郎）
「共存」の意味するもの（W・ヘンリー・チェムバーリン）
戦後政党変遷図
不自然な食生活は子孫を亡ぼす（北橋茂男）
民主主義と選挙［民主主義講座］
直見堂漫談（丹波直見）

第二巻三号（一九五五・三・一）
巻頭言
エネルギーとしての石油（石油精製懇話会理事長　寺尾進）
産児制限についての一所感（明大教授・農学博士　宇田一）
アジアの民族主義と共産主義（世界民主研究所　上別府親志）
酪農危機に際して（鈴木清熙）
［青年のための生理学講座］（二）何をどれほど食べたらよいか（小牧実秀）
修身と修心（田村敏雄）

［新聞の読み方］
取材態度の自粛を（東大教授　千葉雄次郎）
再軍備と新聞（時事新報主幹　内海丁三）
清潔運動への待望（西村紅楼）
食物談義　食物が難病を癒す（北橋茂男）
害虫に対する原子力戦（M・L・ジュニアー）
民主主義と労働運動［民主主義講座］
直見堂夜話（丹波直見）

第二巻四号（一九五五・四・一）
巻頭言
ラジオと現代生活（一回）（文化放送総務局長　幸田武雄）
新中国の治水工事（波多江種一）
［家事相談］　家庭裁判所に映る世相（岐阜家庭裁判所調査官　後藤春吉）
［新聞の読み方］
ガラス張り（時事新報主幹　近藤操）
明暗両相の認識（元毎日新聞主幹　下田将美）
十円牛乳と酪農生活（山本門重）
随想　スラムプ（田村敏雄）

「青年のための生理衛生講座」（三）呼吸はどのようにしておこなわれるか（小牧実秀）
大衆の医学　便秘の根本療法（一回）（藤田正直）
食生活改善の問題点（佐藤朝海）
飛騨の聖地を訪ねて（島口雅光）
直見堂漫談（丹波直見）
詩　風、光、木の葉（大木惇夫）
小説　波紋（長谷川濬）

第二巻五号（一九五五・五・一）

巻頭言
我々の進路は正しいか（近畿大学教授　蘆田正喜）
ラジオと現代生活（二）ラジオと娯楽（文化放送総務局長　幸田武雄）
随筆
露人と牛乳（元ハルピン学院長　清水三三）
人の平均寿命について（明大教授　宇田一）
文化性とは（長谷川濬）
食糧増産の方向（農林技官　村田吉男）
生産と賃金（経済審議庁審議官　金子義雄）
ソヴィエトの賃金制度

他山の石（田村敏雄）
国の予算と税金
［青年のための生理衛生講座］（四）血液と循環器（京都薬大　小牧実秀）
新しい道徳観と教育（高校教諭　原鏡一）
家庭裁判所に映る世相（二）（岐阜家裁調査官　後藤春吉）
大衆の医学　便秘の根本療法（二）
直見豆漫談（丹波直見）

第二巻六号（一九五五・六・一）

新生活運動予算無用論［巻頭言］
経済自立と証券（日本証券業協会連合会長　小池厚之助）
日本―アジアの貿易（日本エカフェ協会事務局長　土井章）
シンクレアは予言する〝三次大戦は必至〟
［巨象を撫でる］―中共中国の寸描―（一盲人）
我等いかに生くべきか（近畿大学教授　蓮田正喜）
［新聞の読み方］（時事新報主幹　内海丁三）
パンを棄てる青年（田村敏雄）
［青年のための生理衛生講座］（五）無機質の代謝（京都薬大　小牧実秀）
随筆

紅茶のしかめ面（西村紅楼）
動物と食物（はせがわ・しゅん）
スラムプについて（日大講師　杉基一）
海洋からの取入れ（ジェームス・ローティ）
食生活の改善（清水三三）
大衆の医学　便秘の根本療法（三）（藤田正直）
直見堂漫談（丹波直見）

第二巻七号（一九五五・七・一）
食物における劣等感［巻頭言］
ソ連平和攻勢の諸要素（ソ連問題研究所　中山貞雄）
憲法問題をめぐって
感情論に先走る改悪派（片山哲）
戦争ボケと占領ボケを一掃（神川彦松）
海の耕作（ハロルド・F・クラーク、ジョージ・T・ベンナー）
［巨象を撫でる］（二）―中共中国風景寸描―（一盲人）
［青年のための生理衛生講座］（六）生物のからだは細胞からできている（京都薬大　小牧実秀）
平均寿命三十億年説（田村敏雄）
［新聞の読み方］

無知か故意か（時事新報主幹　内海丁三）
学者と赤い宣伝（元京城日報社長　高宮太平）
大衆の医学　便秘の根本療法（四）（藤田正直）
瀾停（二幕三場）（岐阜家庭裁判所調停官　後藤春吉）
直見堂漫談（丹波直見）

第二巻八号（一九五五・八・一）
言葉と食べもの［巻頭言］
中共治下の売笑婦達（吉田東祐）
四千九百万分の一「天皇」（宮脇新）
ソ連学生養成上の欠陥（イ・アルタモーノフ）
籠ヶ関脱出の記（池田勇人）
結納の話［家裁余話の一］（家裁調査官　後藤春吉）
職歴というもの（田村敏雄）
「合理の道」の大恩寵（肥田春光）
八幡野訪問記（島口雅光）
［青年のための生理衛生講座］（七）神経組織はどのような構造になっているか（小牧実秀）
直見堂漫談（丹波直見）
グライ湖［大陸の幻想］（長谷川滿）

テレビの新しい仕事
世界のエネルギー数量

第二巻九号（一九五五・九・一）
自主的判断について［巻頭言］
中共情報についての若干の意見（吉田東祐）
吉右衛門と私（池田勇人）
ソ連労働者の生活水準（編集部）
経済発展の水準から見た現代世界各国の区分
両大陣営の戦力比較
食と運勢（田村敏雄）
世界展望―アメリカ、イギリス
ティーン・エージに関する十二章（ジャック・ハリソン・ポロック）
大衆の医学　便秘の根本療法（五）（藤田正直）
直見盆漫談（丹波直見）

第二巻一〇号（一九五五・一〇・一）
「完全食」運動について［巻頭言］
ソ連は天国か（ソ連問題研究会　丸山直光）

学者と常識（日本経済新聞社顧問　小汀利得）
困る話［家裁余話の二］（家裁調査官　後藤春吉）
日本農民の食生活（藤山一雄）
木屑からの奇蹟（キイス・R・マッカーシー）
全体積極主義（杉基一）
人類の強敵〝肺臓癌〟は紙巻きたばこが原因か？
他山の石（池田勇人）
中共政権の支持者達（吉田東祐）
「エレホン」の示唆（田村敏雄）
［青年のための生理衛生講座］（八）ビタミン（京都薬大　小牧実秀）
直見堂漫談（丹波直見）

第二巻一一号（一九五五・一一・一）
公式論からの自己解放［巻頭言］
ソ連教育の新傾向（エリ・ドウブロヴィナ）
食物と西医学（相模女子大教授　西勝造）
統一と合同（池田勇人）
米と塩（田村敏雄）
内縁の話［家裁余話の三］（家裁調査官　後藤春吉）

或る歴史の破片について（吉田東祐）
世界展望―ヨーロッパの住宅ブーム
現下の農村問題（山口清勝）
直見堂漫談（丹波直見）
［赤軍の人々］（一回）（春藤垂）

第二巻一二号（一九五五・一二・一）
外から見た日本［巻頭言］
二大政党の出現によせて（宮脇新）
嫁とシウトの問題（山口清勝）
短歌　帰農史（藤山一雄）
体貌と西医学（西勝造）
慰藉料の話（後藤春吉）
流行評論家の常識の一例―「指導者」を読みて―（田村敏雄）
見おろす政界の大山小山（白山道人）
中国放浪記（吉田東祐）
［赤軍の人々］（二回）（春藤垂）
直見堂漫談（丹波直見）

第三巻一号（一九五六・一・一）

食習慣における保守性と非科学性

政治評論のアルファとオメガ（宮脇新）

［話の種］世界各国のテレビ普及状況

［世界望遠鏡］アメリカ経済繁栄の内容

［政界人物論］見下ろす政界の大山小山（白道道人）

随筆

お猿はめでたや（西村紅楼）

ニコラエフカ創生記（後藤春吉）

ひとりごと（丹波直見）

帰農史（藤山一去）

［海外科学だより］整形外科の発達

今年をあなたの健康の年に　賀状にかえて（田村敏雄）

中共指導者人物系譜（吉田東祐）

［赤軍の人々］（第三話）（春藤垂）

編集室より

第三巻二号（一九五六・二・一）

新生活運動の焦点としての食生活改善運動

開化の道―人生目的について―（作田荘一）
ソ連教育の特色（世界望遠鏡）
スキイ宿の厠―芭蕉の長雪隠の話によせて―（田村敏雄）
現地報告　新しき農村　進展する山口県農山村新生活運動
新しい村造り（藤山一雄）
山口県農山漁村新生活運動の動向（居田雪雄）
村造りを通しての国造り（中山公威）
新生山村の素描（F生）
アメリカ農業の概況
ひとりごと（丹波直見）
帰農史（藤山一雄）
離婚の話［家栽夜話］（後藤春吉）
肝臓のはたらき［青年のための生理学］（小牧実秀）
［赤軍の人々］（4話）（春藤垂）
［中共の人物系譜4］周恩来（吉田東祐）
トピック
米国最大の輸入品目・珈琲
ロマンチックな愛だけでは結婚は成功しない
高血圧薬

編集室より

第三巻三号（一九五六・三・一）

いま何が一番大切か
二種の名文―しろうとの文章論、特に用語について（田村敏雄）
イギリス上流社会における男色の流行［酷のたね］
特集　家庭裁判所―よりよい明日への為に―
家庭裁判所はどんな役目を果たしているか
子は親を養う義務がある（宇田川潤四郎）
調停について（二宮節二郎）
家裁と調停と調査（後藤春吉）
相続放棄と養子縁組（徳武登志子）
家事相談の難しさ（山田薫）
慰藉料の支払いは実行されているか（井川善一）
嫁入り荷物は誰のものか（宮本弥一）
調停協会福祉部はどんな仕事をしているか
坑夫に（詩）（三浦正隆）
ひとりごと（丹波直見）
肝臓のはたらき［青年のための生理学］（小牧実秀）

見下ろす政界の大山小山［政界人物論］（白山道人）
［中共指導者人物系譜5］（吉田東祐）
毒薬変じて妙薬となる（トピック）
進路サロン

第三巻四号（一九五六・四・一）

注射万能的人生観への反省
古事記の謎―古事記はスメル語とチュルケ語で書かれている（後藤春吉）
一つの事実とその判断（田村敏雄）
［見下ろす政界の大山小山］（白山道人）
ひとりごと（丹波直見）
［中共指導者人物系譜］（吉田東祐）
［赤軍の人々］（完結編）（春藤垂）
肝臓のはたらき［青年のための生理学］（小牧実秀）
父母に訴える（小川孝一）
アメリカで再び性病増加す（トピック）
後記

第三巻五号（一九五六・五・一）
商品食物への批判と警戒
血族の飛び地—万葉集の謎に問う（寺田喜治郎）
前波先生の手紙（後藤春吉）
この頃の学者の顔—党派性が強すぎないか（田村敏雄）
憲法と親孝行（双川喜文）
バンコック紀行（渡会浩）
朱光鼎のこと—民主主義以前について（吉田東祐）
ひとりごと（丹波直見）
西岡勘一奮闘録（後藤春吉）
食事の回数【話のたね】
染色オレンジ（トピック）
新刊紹介

第三巻六号（一九五六・六・一）
もっと小さな平凡なことを
二つの理想国（猪俣敬太郎）
ローマ共和政の腐敗（矢野続蔵）
二つの資本主義（ヨーロッパ型とアメリカ型）

政局展望
割り切らない話（田村敏雄）
［見下ろす政界の大山小山］（白山道人）
バンコック紀行（渡会浩）
［家族の頁］
ソ連侵入の日（後藤春吉）
ひとりごと（丹波直見）
セミヨノフ軍医と慰安所（春藤垂）
新刊紹介
トピック
死ぬる権利
胃癌にきく民間薬
おそろしいペニシリン
牛糞から原子力へ
編集室より

第三巻七号（一九五六・七・一）
まず正義と人道に徹せよ［巻頭言］
訪英記（小坂善太郎）

広島の酪農村―現地報告―
牧場で生まれ変わった入野村（末広倉人、山持国三）
中国種畜牧場の沿革と将来（仙波喬）
見はてぬ夢のあと（田村敏雄）
「見下ろす政界の大山小山」（白山道人）
スマトラ工作の想い出（西本大祐）
歩六峠（後藤春吉）
熊岳城（堤一彦）
民法上の氏「家裁の頁」
ひとりごと（丹波直見）
ノイローゼ三人男（春藤垂）
ジプシーの誘惑（徐訏、吉田東祐訳）
トピック
アンナ・カレニナは誰が書いた
ソ連経済の実態
共産主義とカトリック教
編集後記

第三巻八号（一九五六・八・一）

言論自由時代の反省［巻頭言］

満州国の謎を解く　鄭国務総理の想い出（川尻伊九）

郭沫若先生からの嬉しい贈り物　還ってきた植物誌原稿について（野田光蔵）

憲法論議の前進　さらに積極的建設的態度へ（田村敏雄）

開戦の真相　私は何故開戦に同意したか（賀屋興宣）

敗戦の体験と反省

三河余談（佐藤清郎）

終戦前後（瀬古確）

馬鹿正直な日本人（堀文吾）

現地終戦体験記（新帯国太郎）

呼蘭県終戦始末記（後藤春吉）

桓仁の農奴生活と北鮮脱出（新義蔵）

安東脱出記（田中真省）

熊岳城（二）（堤一彦）

ひとりごと（丹波直見）

ジプシーの誘惑（中）（徐軒、吉田東祐訳）

自己を読む

東ドイツから逃げ出す人々

第三巻九号（一九五六・九・一）

斗争より競争へ

偽善と露悪（杉甚一）

三正の説　義務教育の基本的方法について（田村敏雄）

開戦の真相　私は何故開戦に賛成したか（二）（賀屋興宣）

売文業者の悲劇　板垣直子女史の国語国字論

ひとりごと（丹波直見）

祭祀の承継［家裁の頁］

［見下ろす政界の大山小山］（七回）（白山道人）

清水三三先生素描（春藤垂）

故清水三三先生弔辞（小池伝）

遺稿　入植八年（清水三三）

奄美大島紀行（野田光雄）

スマトラの宗教と教育（西本大祐）

ジプシーの誘惑（徐訏作、吉田東祐訳）

岡田虎二郎先生語録

金持ちも麦を喰え！

編集後記

第三巻一〇号（一九五六・一〇・一）
強者の反省
考えようとしない国々（フランク・ブックマン）
奇跡の中の上海—私の見たまま聞いたまま（川尻伊九）
人口対策としての家族計画について（柳田孔斯老）
勝てば官軍—日ソ交渉の教訓（田村敏雄）
犯罪と刑期（保々隆矣）
九州の万葉歌枕を訪ねて（瀬古確）
詩歌の制作と鑑賞について（後藤春吉）
教養のための医化学講座—糖尿病の化学（小牧実秀）
履行問答［家裁の頁］
ひとりごと（丹波直見）
敗戦商売往来（春藤垂）
熊岳城（堀一彦）
ジプシーの誘惑（後日談）（徐訐、吉田東祐訳）
疫痢と黒砂糖
病気観
編集後記

第三巻一一号（一九五六・一一・一）
民主主義の敵
無税国策の提唱（浅田平蔵）
言論自由の権威と限界（本郷弥二）
うけうり話　八珍料理（田村徹雄）
奇跡の中の上海（二）（川尻伊九）
［教養のための医化学講座］（小牧実秀）
結婚シーズンによせて［家裁のページ］
九州の万葉歌枕を訪ねて（二）（瀬古礁）
アメリカ農場だより（丸山祐三）
病床雑詠（清水辰也）
ひとりごと（丹波直見）
テレビと子供の歯（ドクトルF・C・シャーマン）
燃える牡丹江（後藤春吉）
熊岳城（四）（堤一彦）
ジプシーの誘惑（後日談2）（徐訐、吉田東祐訳）
モスコウこぼれ話
スエズ運河の水先案内
新刊紹介

第三巻一二号（一九五六・一二・一）
ほしがってばかりいる今の世相
日ソ復交以後（猪俣敬太郎）
日ソ交渉によせて（田村敏雄）
［見下ろす政界の大山小山］（白山道人）
最近のソヴエトの文化生活（佐藤清郎）
かたわの政治（本郷弥二）
箴言　教育について（岡田虎二郎）
体験健康談（大橋清蔵）
［教養のための医化学講座］（小牧実秀）
禿頭と頭脳
財布のひも［家裁の頁］
九州の万葉歌枕を訪ねて（瀬古確）
アメリカ農場だより（丸山祐三）
ひとりごと（丹波直見）
ジプシーの誘惑（後日談）（徐訏、吉田東祐）
熊岳城（堤一彦）
囚われの身にはあれど　シベリヤの俘虜生活から（瑠文吾）
編集後記

第四巻一号（一九五七・一・一）
ころばぬ先の杖
東欧革命の教えるもの（猪俣敬太郎）
家庭料理のうまいわけ（池田勇人）
めでたさ（田村敏雄）
［見下ろす欧界の大山小山］（白山道人）
赤子（アルベルト・モラヴィア　佐藤清郎訳）
夫婦の和合［家載の頁］
九州の万葉歌枕を訪ねて（瀬古穣）
科学は肉食を無用にした［医化学講座］（小牧実秀）
体験健康談（難波精三）
ひとりごと（丹波直見）
難民生活やりくり話（春藤垂）
囚われの身にはあれど（堀文吾）
皆人の精神的健康について
編集後記

第四巻二号（一九五七・二・一）
健康・医者・医学

二つの自由（猪俣敬太郎）
意識の立ちおくれをなくす道（田村敏雄）
冷飯の味（信濃町夜話）（和田清好）
アメリカ教育の二大問題
同居と別居［家族の頁］
体験健康談（岡田トシ）
病体と病心
国立療養所（入江訓信）
寿命と病気
断食後想（後藤春吉）
緑を食べる（北橋茂男）
難民生活やりくり話（春藤垂）
ひとりごと（丹波直見）
九州の万葉歌枕を訪ねて（瀬古確）
長春脱出記（野田光蔵）
囚われの身にはあれど（堀文吾）
編集後記

第四巻三号（一九五七・三・一）

何が大切か

第三次世界大戦の発火点（土田定次郎）

一千億減税と完全雇用（池田勇人）

スジを通す（信濃町夜話）（和田清好）

社会保障無用論（山谷伯逸）

はずかしさからの解放［前後際断］（田中忠雄）

満州の植物をたずねて（野田光蔵）

家事相談［家栽の頁］

日本医薬学の活用による恒久・基本的アジア政策（渡会浩）

メキシコで開催された第二〇回国際地質学会に出席して（遠藤隆次）

死者からの死亡通知

中国観さまざま（西本哲三）

ひとりごと（丹波直見）

敗走三都（後藤春吉）

チョロマ（野末晴三郎）

［日本文学の栞］（瀬古確）

アラスカ犬も日本では日本食

結婚百周年祝

玄米は吸収が悪いか
長生と海草・野菜類
編集後記

第四巻四号（一九五七・四・一）

ひま人の責任
まず健康だ（三島寛）
私はこう考える（池田勇人）
生きた予算制度の夢（山谷伯逸）
ハワイのカニ（信濃町夜話）（和田清好）
推理小説について（猪俣敬太郎）
阿部真之助さんと酒［前後際断］（田中忠雄）
田舎大工のすばらしい考案（柳田孔斯老）
セルゲイジヤーロフのこと（長谷川潔）
秀才病と生を養うこころ（小野正康）
ケースワーク［家裁の頁］
礼楽私解（後藤春吉）
ひとりごと（丹波直見）
［満州の植物をたずねて］（野田光蔵）

[日本文学の栞]（瀬古確）
書評
力道山の食べもの
アメリカの精神病患者
牛乳に勝る生野菜食

第四巻五号（一九五七・五・一）
社会改造と自己改造
ソ連の危機（山谷伯逸）
ブームと体制（信濃町夜話）（和田清好）
曲がり角に来た医学（三島寛）
二人の殺害者［前後際断］（田中忠雄）
築山ドクトルの話（春藤垂）
古田夫妻の引場生活
北海道開発について（尾崎照夫）
履行難［家裁のページ］
玄米飯の炊き方（渡会浩）
ひとりごと（丹波直見）
団体における健康管理の実例（福永康夫）

「満州の植物をたずねて」（三）（野田光蔵）
「日本文学の栞」（三）（瀬古確）
アメリカ高校生のふところ具合
労働階級はますます貧困化するか
編集後記

第四巻六号（一九五七・六・一）

対立斗争の本質は相補向上である
民主主義体制の限界条件としての所得水準（山谷伯逸）
二つの戦争映画（猪俣敬太郎）
くその研究「前後際断」（田中忠雄）
かかあ天下「家栽の頁」
ひとりごと（丹波直見）
日本文学の栞（瀬古確）
満州の植物をたずねて（野田光蔵）
我流徒然草（後藤春吉）
療養記（長谷川潜）
断食療始末記（三島寛）
はなしのたね

第四巻七号（一九五七・七・一）

顔とからだに対する自己責任

何故教師は労働者でなければならないか（山谷伯逸）

ソ連政策の突然変異（香川重信）

聞き書・インドネシヤ事情（田村敏雄）

進歩的迷信について［前後際断］（田中忠雄）

漱石の禅（猪俣敬太郎）

エレガントな葬式（三島寛）

我流徒然草（後藤春吉）

代書料［家裁の頁］

西医学に依る治験例（渡辺正）

家庭常備の和漢薬（佐藤潤平）

ひとりごと（丹波直見）

満州の植物をたずねて（五）（野田光蔵）

療養記（長谷川清）

アメリカ人口の激増

風邪と砂糖

精液銀行の提唱

アメリカ人の娯楽消費

編集後記
第四巻八号（一九五七・八・一）
米を見なおそう
ソ連政変の謎（猪俣敬太郎）
ソ連政変と問答無用の集団指導（香川重信）
三悪追放になぜ人気がわかないか（山谷伯逸）
保々隆矣先生小伝（後藤春吉）
もの申す（改造内閣片言）（和田清好）
君子さんしっかり［前後際断］（田中忠雄）
国民皆保険を吟味する（三島寛）
相続放棄［家数の頁］
ひとりごと（丹波直見）
日本文学の栞（瀬古確）
映画雑考（越田清七）
療養記（長谷川潜）
中共の豚の平均体重
フランス共産党の凋落
編集後記

第四巻九号（一九五七・九・一）

インテリの類型

共産主義の黄昏（猪俣敬太郎）

独裁政治と廉正（香川重信）

雨のジュネーブより（内田常雄）

［時相片々］（越田清七）

十年政権への戒律（政界随想）（和田清好）

粗製濫造された文化人［前後際断］（田中忠雄）

蒙古の祭（西本哲三）

少年審判［家裁の頁］

家庭常備の和漢薬考（佐藤潤平）

満州の植物をたずねて（野田光蔵）

ひとりごと（丹波直見）

療養記（長谷川清）

ネール兄妹の乗用車

アメリカにおける少年犯罪

風邪の妙薬・線香の粉

赤は赤でも

第四巻一〇号（一九五七・一〇・一）

巻頭言・道徳教育論の盲点

財政について（池田勇人）

派閥解消論を嗤う―派閥は必然であり必要である（宮脇新）

日本民族の進路（伊藤六十次郎）

独裁政治と粛正（香川重信）

猿とねずみの道徳教育（田中忠雄）

教師の立場としての意見

道徳教育の再検討（本郷秀夫）

最近の道徳教育について（山田弥寅）

日本の農民と中国の農民（桑原蕃二）

政界随筆　吉右衛門の勲章（和田清好）

［家載の頁］蓼子縁組

私生活について（猪俣敬太郎）

ひとりごと（丹波直見）

我流徒然草（後藤春吉）

［満州の植物をたずねて］（野田光蔵）

国民皆保険を吟味する（三島寛）

［日本文学の栞］―洒落本と通（瀬古確）

フォルクスワーゲン工場の民営移管
無帽主義は危い？
編集後記

第四巻一一号（一九五七・一一・一）
［巻頭言］マルクス主義阿片説
政府の国際収支予測の大違算とその反省（高橋亀吉）
池田勇人大いに語る（聞く人　宮崎吉政、和田清好）
日本民族の進路（伊東六十次郎）
独裁政治と廉正（香川重信）
社会主義とアジア経済開発の問題（米津三郎）
［前後際断］狂い咲きした博士たち（田中忠雄）
［家裁の頁］出生と認知
秋燈雑記（猪俣敬太郎）
国民皆保険を再吟味する（三島寛）
［家庭常備の和漢薬考］（佐藤潤平）
［日本文学の栞］（瀬古確）
療養記（長谷川濬）
人工衛星問題と国家体制

近刊予定
編集後記

第四巻一二号（一九五七・一二・一）
［巻頭言］公私の別
日本政治の反省（矢部貞治）
金融について（池田勇人）
日本民族の進路（伊東六十次郎）
ソヴェート民族政策について（米津三郎）
独裁政治と粛正（香川重信）
道徳教育の問題点（本郷秀夫）
道徳教育と社会科の独立について（小野正康）
岩見重太郎論（田中忠雄）
家族の十字架
［家庭常備の和漢墓考］（佐藤潤平）
ある自然生活者（三島寛）
ルポルタージュ　死の断食に参加して（猪俣敬太郎）
教師不足に悩むアメリカ
新刊紹介